



※臓器移植考※

「謹んで申し上げます。」

この度 臓器提供に深く感謝致します。今月に入り、私の移植後は経過順調でドクターの方から初めて提供してくださった方のお話を聞くことが出来 遅くなりましたが、謹んでお礼申し上げます。

私は、26才の時 臓器が急に悪化し人工透析を週3回受けに通院してまして、尿も無尿でしたが 提供いただいた臓器が順調に働いており 手術後10日目から尿が出て来まして 今では正常人なみの量が出て おかげ様で透析もはずれました。これから 第二の人生としていただいた臓器を大切にして 生きていきたいと思えます。本当にありがとうございます。 謹白

これは、平成6年7月に急逝した夫の臓器を提供受けた方からのお礼の手紙です。

夫と私は、お互いに臓器移植とアイバンク(角膜移植)に登録しておりました。大学病院の集中治療室の中で、夫は心臓がどんどん壊れていき、一旦呼吸が止まった時に装置の装着に30分の時間がかかり、その間に酸素が脳に行かなかったために脳死状態になりました。

入院して半日のできごとの中で、夫の財布の中に生前、お互いに入っていた臓器移植バンクとアイバンクのカードが入っていることに気がつきました。

移植は、角膜と臓器だけだと思っておりました。

突然、主治医と移植コーディネーターに呼ばれ、その他に提供できるものはないかと書面を出されました。内臓と骨と皮膚の提供項目がありました。

皮膚は、冷凍保存されます。大火傷をした方に移植すると、移植された皮膚が核となり、その方の皮膚が新しくでき、最後に核となった皮膚は不要となり、落ちるそうです。骨は関節部分が移植されると、説明を受けると断れない。断ると人ではないような、待ったなしの状態でした。

二人対一人、私の後ろには親族が黙って私の判断を待っていました。

「骨は残るから」

とのひと言が後ろからかかり、皮膚の提供だけにまるを付けました。その時「虎ノ門の先生(臓器移植)が早くと言ってます」と看護師の声が流れ、主治医が慌てて外に飛び出しました。

さすがに、移植を断ろうかと思いましたが、夫の遺言であると考え込み上げて来る怒りで震える右手を左手で押さえサインしました。

臓器移植のスタッフが揃った段階で、酸素を送る機械は止められ、心電図は平らになりました。私はすぐに外に出され、医師達が身体に入っていたチューブを抜き始めました。

バンととびらが両側に開けられ、白い布に覆われた夫の横たわる寝台を何人かの白衣の医師が勢いよく走って押して奥のトビラの中に消えていきました。

夫が戻って来たのは5時間くらい経ってからでしょうか。両膝と背中、大きな白い布を貼られてました。

「フレッシュな臓器でした」

移植コーディネーターから告げられた時、夫は人ではなく、もう物体なのだと感じました。

角膜で2人、臓器で2人、皮膚で1人の方に提供しました。5人を救っただけでなく、その方のまわりの人、家族も救ったのだとも告げられました。

NHKに取材された時に、突然に他の臓器の提供の話がされると家族が困惑することを話しましたが、脳死から臓器移植のことだけが放送され、その部分はカットされていきました。

救われたのは、冒頭の手紙です。

移植で助かった人がいた証の手紙は17年経て薄茶色になりました。